指導計画案

時限	導入	展開	まとめと発展
指導上の重点目標	1 小説などのフィクションを通して、私たちは、効果的に常識的な道徳観や認識を問い直していくことが多い。効果的になるのはなぜなのか。構成や描写について、具体例を挙げながら話し合ってみよう。		
学習活動	① ワークシートと振り返りシートを配布する。	① フィクションの舞台設定や人物設定に注目する。思判表 ② 小説の内容と表現のつながりを考える。知技・思判表 ③ 『羅生門』と『城の崎にて』の締め括り方は読者に何を投げかけるのか、考える。思判表 ④ 小説などのフィクションの効果を考えるための方法として、模擬裁判を行う。主態	① 振り返りシートに記入させる。
指導上の留意点	・『羅生門』と『城の崎にて』の舞台設定について、それぞれどのような点が工夫されているのか、小説の内容を振り返りながら考えさせる。 ・『羅生門』と『城の崎にて』の主人公（「下人」「自分」）について、小説の始まり近くで示される設定をまとめ、読者にどのような展開を期待させるのか、考えさせる。	① ② 『羅生門』と『城の崎にて』について、印象に残った場面や気になる語り口を抜き出し、それぞれの表現の特徴を比較させ、考えさせる。 ・『羅生門』の末尾は「下人の行方は、誰も知らない。」であり、『城の崎にて』の末尾は「自分は脊椎カリエスになるだけは助かった。」である。 ・それぞれの小説がどのような先入観を問い直したのかとかかわらせて、考えさせる。 ③ ④ 語り手に導かれた読み方を受け取るだけでなく、自分の視点で捉えてみれば、積極的に小説の世界を問い直せるのではないだろうか。そうした読みの実践として、検察官・弁護士・裁判官（陪審員）に分かれ、小説を調書に見立てて、登場人物の言動などを吟味し、原告・被告それぞれに寄り添いながら議論をさせる。 ①『羅生門』　原告＝「老婆」　被告＝「下人」 ②『城の崎にて』　原告＝「いもり」　被告＝「自分」	